



～ 2011 施設公開を開催しました ～

4月24日(日)に、農業センター本館や試験・研究圃場を会場に、試験研究成果等のパネル展示、園芸・科学教室、農家有志による野菜・果樹苗の販売コーナー、ヒヨコとのふれ合いコーナー、スタンプラリー、丸太切り等を実施しました。毎年、開催している施設公開は、東京都科学技術週間のイベントとして実施しており、4月18日「発明の日」を含む一週間を科学技術週間としています。

今年の施設公開は天気に恵まれ、350名以上の方々に足を運んでもらえました。子供たちに一番の人気は、ヒヨコとのふれ合いコーナーでした。絶えず子供たちが集まり、日頃、触れたことないヒヨコを抱きかかえる姿が微笑ましく、元気で明るい声が響きわたっていました。

大人に一番人気だったのは、農家の皆様やJAの協力による野菜苗や果樹苗の販売コーナーでした。特に野菜苗はあっという間に売り切れ、皆さんの園芸や新鮮な野菜に対する意識の高さを知ることができました。

試験研究成果報告については、本館でパネルや標本等を展示し、水産センターの成果展示コーナーや小笠原総合事務所植物防疫コーナーを加え、充実した展示となりました。

試験・研究圃場を中心に実施したスタンプラリーは、約250名もの参加がありました。顕微鏡や標本を見て回答を考えるなど、お子さんには難しい問題があったかもしれませ

んが、多くの方が全問正解となりました。

「小笠原の昆虫」「パッションフルーツの一年」と題した園芸・科学教室にもたくさんの方々に参加いただきました。昆虫は標本を、パッションフルーツは実験圃場を見ながらの説明に、参加者の皆様からご好評をいただきました。



写真1 スタンプラリーは圃場を巡回して回答

最後になりますが、ご来場いただいた皆様、ご協力いただいた関係機関の皆様に、職員一同、深く感謝と御礼申し上げます。<渋谷>

農業者セミナーのお知らせ

意欲ある農業者を対象とした農業者セミナーを7月以降に開催します。詳細は、別途お知らせいたします。 < 宗 >

土壌診断のお知らせ

農家を対象に、畑の土壌診断を行います。提出期限は7月上旬の予定です。詳細は、別途お知らせいたします。 < 佐藤 >

～ 平成22年度の研究成果概要 ～

今年2月に母島および父島で「成果報告会」を開催しました。以下に農業センター、営農研修所、畜産指導所の研究成果概要を紹介します。

1. 小笠原村におけるバニラ栽培

小笠原村においてバニラ試作した結果、バニラは定植時の穂木長が長いほど初期生育が優れ、穂木長90cmの苗は定植から1年後に新梢長350cm以上となりました。また、育苗期の尿素葉面散布は新梢伸長の促進効果はありませんでしたが、葉色向上効果がありました。



(近藤) 写真2 バニラの実

2. アテモヤの夏季剪定の収量と果実特性

8月剪定によるアテモヤの高品質化を試みたところ、果実重665g、糖度がBrix29%であり、収量は自然受粉区を合わせると1,729g/m²となりました。また、成熟期間が長いほど果実重が大きくなる傾向がありました。

(馬場)

3. パッションフルーツの落下試験

果実が入った出荷箱を高さ0.25mから落下させると一部の果実では果肉が剥がれ、商品性が低下しました。高さ1.0mから落下させると果実品質が低下しました。出荷箱内の上面に敷設してある緩衝材を底面に入れ替えると果実品質の低下を緩和できます。

(宗, JA 東京島しょ小笠原と共同研究)

4. パッションフルーツの長期貯蔵試験

果実を保存袋に入れ、8℃で低温貯蔵する

と低温貯蔵庫の種類および鮮度保存被膜剤の有無および種類に関係なく、1ヵ月間の貯蔵が可能でした。さらに、保存袋と氷感庫を組み合わせると果汁の糖酸比を低下させず、シワがなく2ヵ月間の貯蔵が可能です。

(宗, JA 東京島しょ小笠原と共同研究)

5. 病害虫防除試験の取組み

アフリカマイマイは、母島において依然として島全体に高い密度で生息しています。蔵卵率は父島、母島ともに低下しましたが、今後の密度変化にどの程度影響を及ぼすのかは、さらに検討が必要です。また、2004年～2010年にかけて母島におけるアフリカマイマイの生息密度を調査したところ密度変化は、分布なし型、低密度型、隔年変動型、山型変動型、増加型に分類することができ、地域ごとに特徴が見られました(図1)。それぞれの地域に合わせた防除対策が必要です。

(近藤)

6. カササギコウモリによる農業被害への対策

天然記念物のオガサワラオオコウモリとの農業の共存を図ることを目的とし、対策試験を行いました。ホワイトサボテの圃場にオオコウモリが絡まることがない樹脂製のネットハウスを設置しました。防除効果は認められ、233m²のネットハウスの設置に掛かる資材価格は737,576円、延作業時間は90時間30分でした。

また、安価で容易にできる被害軽減対策を甘夏、菊池レモンで行いました。甘夏に設置した光反射テープと点滅灯区で効果がみられ、菊池レモンに設置した超音波発生装置では効果がみられませんでした。(馬場・宗)

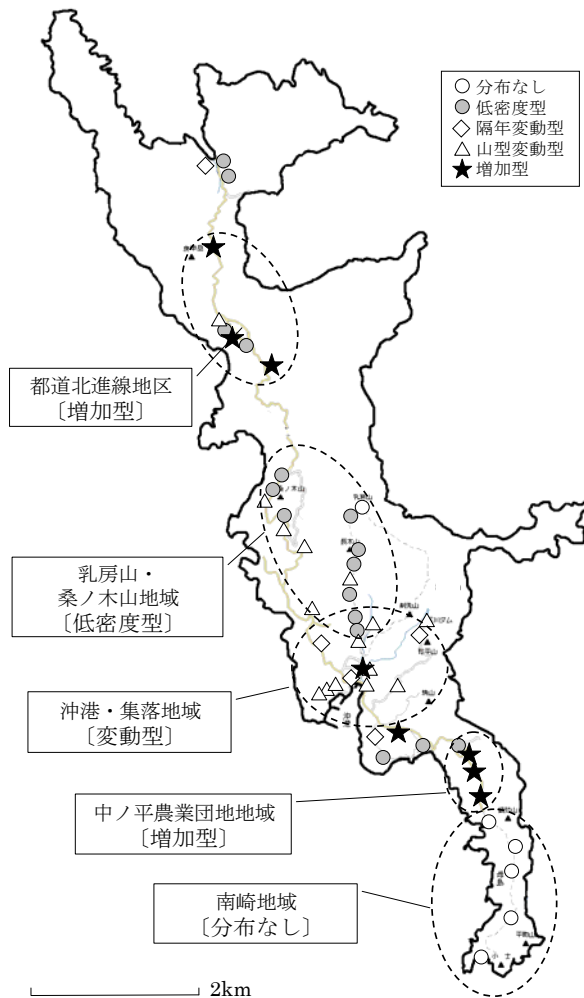


図1 母島におけるアフリカマイマイ生息密度変化の地域的特徴

7. 小笠原諸島の施設土壌の実態調査

小笠原諸島の土壌は有機物が少なく、保肥力が小さいです。鉄骨ハウスでは交換性石灰と可給態リン酸が増加傾向にあり、一部では過剰蓄積がみられました。毎年、行っている土壌診断結果を参考に肥培管理を行う必要があります。

(佐藤, 東京都農林総合研究センターと共同研究)

8. 母島におけるトマト、パッションフルーツ栽培

母島の代表的なパッションフルーツ栽培農家の収量は 580~2,793kg/10a です。平成 23 年度の作付面積は、鉄骨ハウスが 8,537 m², パイプハウスが 3,322 m², 露地が 2,858 m²です。収穫予測は6月にピークを迎え、8,480kg/月です。トマトは2010

年の作付本数で、ミニの「甘っこ」が大玉の「桃太郎エイト」を抜き、主力品種となっています。(佐藤)

9. 炭酸ガスによる廃鶏処理について

できる限り苦痛を与えない方法で鶏を意識喪失の状態にしてから殺処分を行う方法として、炭酸ガスによる殺処分を開発しました。採卵鶏では最大8羽まで入れることができる75Lの容器に炭酸ガスを25L/分で注入し、5分後に殺処分が完了します。(舛屋)

10. 畜産指導所におけるクロピラリドの生物検定

クロピラリドは日本では認可されていない除草剤の成分で、牧草として海外から輸入され、それを食べた家畜のフンに含まれます。そのフンを用いた堆肥を育苗土に使用すると生育障害がみられます。耐性が弱い植物はトマト、エダマメ、シラマメ、ヒマワリです。一方、強い植物はイネ科、アブラナ科、ユリ科、シソ科、ナデシコ科、バラ科です。



写真3 クロピラリドによる生育障害
~先端葉のカップリング~

(舛屋)

詳細は以下のホームページをご覧ください。

検索 小笠原支庁 → 小笠原亜熱帯農業センター → 試験研究成果概要

<宗>

～ 着任職員の紹介 ～

しぶや けいすけ
渋谷 圭助 所長



このたび所長として赴任しました渋谷です。前回（H8～13年度）の赴任から10年ぶりの小笠原です。当時センターが研究に力を注いでいたパッションフルーツやトマトが基幹作物に成長していて、生産者の方々の努力に敬意を払うと同時に、感慨深いものを感じています。今回は所長として小笠原農業の発展に尽力しますので、よろしくをお願いします。

おおばやし たかし
大林 隆司 研究員



4月に近藤研究員から交代しました。平成6年度から9年間の勤務に続き、今回8年ぶり2回目の返り咲きとなりました。1回目の赴任時と最も大きく変わったことは、世界遺産登録推進にあるように小笠原の自然と調和・共生した農業でしょう。前回の経験を活かしながら小笠原農業の振興に役立ちたいと思いますのでよろしくをお願いします。

くぼた さとみ
窪田 理美 研究員



4月から谷藤研究員と交代しました。窪田理美と申します。ゴレンシやレイシ、カンキツ類といった熱帯果樹類を主に担当します。小笠原への赴任は今回が初めてで、昨年度は農林総合研究センター（立川市）で果樹を担当していました。これから小笠原農業の振興に役立てるよう力を尽くしていきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

農業センターの研究・実証展示分担が決まりました。所長の**渋谷**は全体の総括と遺伝資源の保存・展示、**馬場**は実証展示主担当で他にアテモヤ・ホワイトサポテ・花き・観葉類、**大林**は病害虫主担当で他に野菜類、**宗**は小笠原固有植物主担当で他にパッションフルーツ・ジャボチカバ・コーヒーと当ニュースの編集、**窪田**は熱帯果樹主担当でゴレンシ、レイシ・カンキツ類・新規導入植物の担当となりました。ご質問、ご要望は各担当者によりしくお願い致します。

平成23年4月1日付けで亜熱帯農業センター所長の**金子章敬**は中央改良普及センター東部分室（江戸川区）へ、研究員の**谷藤家信**は農業振興事務所（立川市）へ、**近藤健**は西多摩農業改良普及センター（青梅市）へ、異動となりました。

・・・・長い間お世話になりました。・・・・

農業センターニュースは小笠原亜熱帯農業センターのホームページにも掲載しております。



検索

小笠原支庁 → 小笠原亜熱帯農業センター → 農業センターニュース